

【コメント】

コメント

森 明 香

ただ今ご紹介に与かりました高知大学の森明香と申します。

私は専門が環境社会学という分野です。「ダム建設をめぐる流域社会」をテーマにして、熊本県南部を流れる球磨川流域の川辺川ダム計画の反対運動について、学生時代から調査し、主に地元でお話を伺ってきました。私は名古屋の出身で、球磨川や川辺川の流域の出身ではないので、そういった点では、地元の間人ではない者がその環境紛争にどう関わるかということは、私自身にとっても大きなテーマだったことを、今日お話を伺いながら改めて考えさせられていました。

お三方にご紹介いただいたそれぞれの事例で共通することですが、狭い意味での当事者とは言えない人たちが、その問題にどういう形で関わろうと考えることが大事なのか。こうした観点から、まずはコメントできればと思います。くわえて、副題の一つである「科学」ということとも関わるかもしれないのですが、正当であるとされてきた「知」というのは、一体どんなものであり、どんなふうに変化してきたのかについて、民俗学の概念を参照してお話ししたいと思います。

まず、当事者ではない人が関わることについて。ピキニの問題もそうだと思いますし、高知パルプの事件もそうなのですが、被害を直接受けている立場ではないだとか、その家族ではないという人が、一体どんな形で問題に関わることができるのか。それを考えるときに、宮地尚子先生というトラウマの研究をされている医療人類学者ですけれども、その方が書かれている「環状島」という概念が参考になるのではと思ったので、ご紹介します。

板書で説明をしたいと思いますが、実は私、高校のとき美術は3以上取れたことがないので（笑）、絵心がなくて非常に恐縮なんですけども。

図1は「環状島」の断面図になっています。「環状島」は外海に囲まれ、真ん中に沈んだ内海のあるドーナツ型をした島のことで、悲惨な経験をしてしまった人や、その周りにいる人の位置関係やトラウマをめぐる表象について整理する概念図として、宮地先生が考えたオリジナルのモデルです。犠牲者と被害者の関係、被害者と支援者の関係、

高知人文社会科学研究第5号(2018)

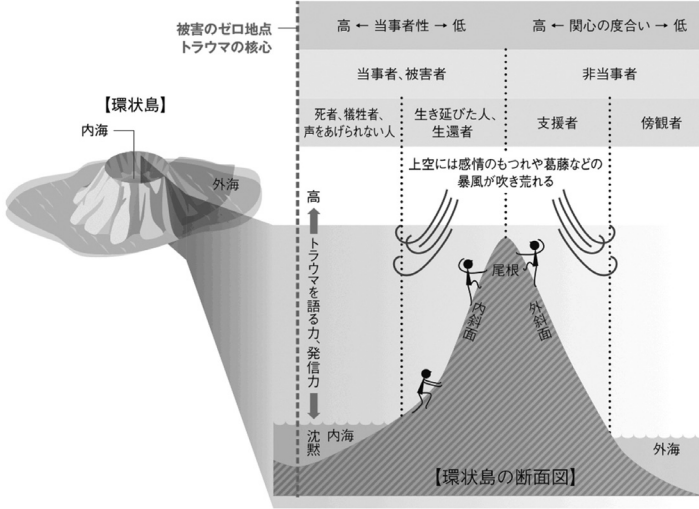


図1 『TOKYO人権』51号より引用：『震災トラウマと復興ストレス』と『環状島』所収のモデルを一部加工

傷と社会との関係、声を上げられる/上げられないこととその条件などを整理するにも有用だと言います。

この内海には、当事者で声をあげることができない人が沈んでいます。死んでしまったりだとか、被害の程度があまりにも大きすぎて言語化することさえもできない状況やその渦中にいる人たちが、ここに位置付けられます。一方、外海には、その事象に対する傍観者やそれを知らない人、関心のない人が、海の下に沈んでいます。

内海には被害が強すぎて声をあげられない人。外海には関心のない人。そしてこの斜面に位置するのは、支援者(外斜面)や、被害者でも被害について語りうる、声をあげる人(内斜面)です。ただ、斜面では常に重力がかかり風が吹いています。重力とは被害による反応や症状、風とは対人関係の混乱や葛藤を指しています。斜面に居ると、当事者は内海と尾根、非当事者は外海と尾根との間を行ったり来たりしうる状態です。

例えばビキニの問題でいえば、今日お話にあった被爆者の船員さんたちは内斜面から尾根近くにいると思います。そして山下さんも、外斜面から尾根に非常に近くいらっしゃるのではないかなと思いつながりながら今日のお話を聞いていました。

この山の尾根にいる人が、語り得ない内海の声がある面では代弁し、支援者にも回り、外海の人たちとつなぐ役割を担うこともある。ただ、そこは山の一番高い場所でもあ

るので、重力にも強風にも常にさらされてしまう。そうした中で、当事者は重力に耐えかねて場合によっては内海に転がり落とされかねない可能性があるし、同じように、支援者は強風に煽られて外海に転がり落ちる可能性があるといえると思います。

環境紛争はこうしたことが起こりうるし、渦中にある方や支援者は「環状島」で描かれるかたちで社会と関わらざるを得ないことがままあるように思います。

今日、田中さんが紹介くださった宇井純先生は「公害問題に第三者はいない」と言っていて、きっとそれって、いろんな社会問題に関して共通して言えることなんじゃないかと思うんですね。

今日この場に来てくださって、お話しがあった問題をお知りになった皆様方は、もしかしたら最初ここ（外海）にいた方かもしれないし、このへん（外斜面の中央）にいた方かもしれない。それを、外海に転がり落ちそうになったときにどういうふうにつながりながら、その立場を維持していけるか。あるいは、山の尾根近くに立つ人を強く支えていける立場になれるかということ、一緒に考えてみたいと思いました。それはまさに、狭い意味での「当事者」でなくても、それぞれの問題に関わっていくことを考えるために大切な視点ではないかと考えさせられました。それが1つ目です。

次に2つ目ですが、特に猪瀬さんのお話を聞きながら感じたところですが、これについては、民俗学の篠原徹先生という、今、琵琶湖博物館の館長をされている方の考え方を転用させていただきたいと思います。篠原先生は、国内外のフィールドワークを通じて、その土地の人と自然とがどのような関係を取り結んできたのかということ、 「自然を生きる技術」という概念で描き出していらっしゃる方です。

その「自然を生きる技術」というものが一体どういうものからなっているかを表したのが、篠原先生が2010年にインタビューで示している、この図2になります。「自然を生きる技術」というものは、全体として「身体知」と「自然知」、そして「道具」というものの総和からなっています。

まず「身体知」というのは、その土地でいろいろな経験を積む中で身体機能を活かしながら、自然との向き合い方を体得していくこと。例えば、漁師さんが使われる「ヤマアテ」なんかは、身体知の典型的な例だと説明しています。次に「自然知」というものがどういうものかということ、これは、野に関する博物学的な知識だというようなことを言っています。例えば、食べられる草や薬草だったり、一体どういうところに生えていて、それをどう採取し、乾燥させ、加工し、それを煎じるかなど、利用に至るまでのプロセスについて知っていて、さらにそれをどんなペースでどれくらいの量を探ってい

ればその草が持続可能なのか、ということに関する総合的な知のことを「自然知」と言っているんですね。さらに、もう一つの「道具」は何かというと、この知識を実現に向けて進めていくための簡単な技能である、と。例えば、一番原始的な道具で言えば、稲刈りをするときの鎌などが想定されています。こういったものの総和として、篠原先生は「自然を生きる技術」を捉えています。

これが、過去から現在に至る間に、「身体知」と「自然知」については人間が持つものがだんだん少なくなっていて、一方で「道具」がどんどん複雑になってきた。そうしたことによ

て、「自然を生きる技術」の中身が変わってきた側面があるのではないかと提起されています。例えば、稲刈りをする鎌がコンバインになるなど、機械が非常に高度化して複雑になるので、マニュアル化されることで人は複雑な機械を使えるようになっていく。そうすると、そもそも持っている知識や経験値みたいなものは広くも深くもなくても、技術はさほど問題なく機能していく。過去から現在に至るまでに、そうした変化があるんじゃないかということ、指摘されているんですね。

この話が、猪瀬さんがお話くださったこととどうつながると私が感じたかということ、「身体知」「自然知」というのは、その土地で生きるという経験の中で育まれた知恵や、ある種の知識、あるいは文化とも言えるかもしれません、そういったものを指しているというふうに言えるのではないかと。この「道具」というものは、現代に近づけば近づくほどマニュアル化され、非常に複雑な、パッケージ化されたものになっていったという側面がある。猪瀬さんが発表の中でも話して下さっていたように、人間があまり考えなくても、マニュアル化されたものに乗っかっていけば、その土地の計画、開発計画とか農村計画とか、そういったものが進んでいくときに対抗できなくなっていく。それに抗う一つの策として、猪瀬さんがいう「ヌルヌルした生の声を掘り起こす」ということがあるのではないかと。そんなことを感じさせられました。

今は、第一次産業に従事している方々の人口が減り、農業のIT化についても非常に危惧を抱いているというようなお話を、以前猪瀬さんから伺ったことがあります。それはある意味でマニュアル化された農村のあり方というか、そういった方向に近づこうと

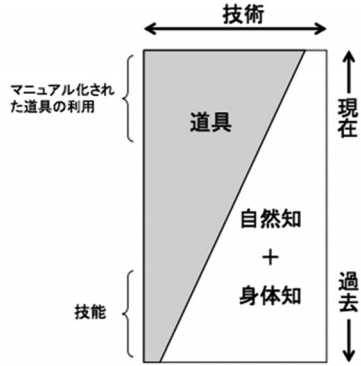


図2 「生物多様性インタビュー⑨
篠原徹さん」より引用

しているとも言えるのではないか。そうなっていくときに、一体この先、窪川はどんなふうになっていくのか。どういった、現段階での感覚なり感想なりをお持ちなのかというのを、ぜひとも質疑の際に伺ってみたいと思いました。

口頭での説明だったので、少しわかりにくい点もあったかもしれませんが、私からは以上です。ありがとうございます。

【参考文献】

中部地方環境事務所 2010、「生物多様性インタビュー⑨ 篠原徹さん」

https://chubu.env.go.jp/nature/mat/data/m_3_6/m3_6_10.pdf 2017年12月20日最終アクセス

(公財)東京都人権啓発センター 2011、「特集 震災と人権」『TOKYO人権』51、p.6-7

https://chubu.env.go.jp/nature/mat/data/m_3_6/m3_6_10.pdf 2017年12月20日最終アクセス

宮地尚子 2007、『環状島－トラウマの地政学－』みすず書房

——— 2013、『トラウマ』岩波書店

篠原徹 2005、『自然を生きる技術－暮らしの民俗自然誌－』吉川弘文館

(もり さやか 高知大学教員)

